自誡

一喜平次殿、才に不足は是なく候、才の餘り候より、物毎に心付も細かにやかましく是有り候、細かにやかましきを、此方よりも細かにやかましく教訓致候ては、影を惡て趨ると申譬ひの如く、愈細かにやかましく成行候、只日用の事を、靜に大まかに取扱申べき事に候、

一喜平次殿、當分剛氣に相見へ候得共、皆以鋭氣秀發する迄に候、剛氣は全く薄く是あり候、剛氣は根强く、物に屈する氣なきを申候、鋭氣はするどしと讀て、切れ味、はやり氣の事を申候、鋭氣は人君に望む事は是なく候へ共、しかし鋭氣を剛氣の種と爲さず候へば、剛氣を長じ候ことは是なく候、先々鋭氣を挫かず、生育候内より、剛氣に轉じ候樣に、是あり度候、

一喜平次殿、險忌の性も、隨分是あり候、其内又仁恕の心も成程是あり候、險忌の性に深く頓著なく、仁恕の心を長じ候樣に、生育是あり候へば、追々險忌の性は薄く成行申べく候、此所能々勘辨是あり度候、○中略

國の安危は、世子の身に掛り候事に候へば、大切なる事に候、面々朝暮の事、見聞せしめ候所、痛入たる事共に候へども、及だけの教誨に、猶も心を盡し、如在なき樣に、吳々賴入計りに候、不悉、

前中書王○明兼

〔本朝文粹十二〕座左銘 并序

東漢崔子玉作座右銘、大唐白樂天述其不盡者、作續座右銘、本朝愚叟元謙光拾其遺云座左銘云爾、

以忠事其君、以孝事其親、信以交朋友、慈以撫子孫、貧而莫下志、富而莫驕人、久要勿忘舊、一言勿忘恩、疾靈入從耳、不如無所聞、禍胎出自口、須緘其於唇、利者恨之府、名者實之賓、浮生薤上露、榮華夢中春、爭奈齡空邁、可惜過良辰、不擊缶而謌、何以慰吾身、

江都督○匡房

〔朝野群載一文筆〕續座左銘 并序

後漢崔子玉作座右銘、唐白樂天續之、本朝元謙光作座左銘、今江滿昌亦續之、